

ハドリアヌス帝のアテナイ「復興」とヘロデス・アッティクス父子

桑山 由文

はじめに

ローマ皇帝ハドリアヌス（在位一七〇—一七八年）は、「過去の栄光」を失って久しかったアテナイにさまざまな建築物を造ったことで名高い。当時、アテナイの経済的中心はアウグストゥス帝期完成の新アゴラにあったが、ハドリアヌスはその北に、ほぼ同様の形状の「ハドリアヌスの図書館」を造り、都市中心を二倍に拡充した。また、アクロポリスからみて南東の地域では、オリュンピエオン（ゼウス＝オリュンピオス神殿）を完成させた。ここは、前六世紀末以来、建築の試みが数度にわたっておこなわれたものの、ハドリアヌス帝期まで工事未完のまま放置されていた聖域であった。パウサニアス『ギリシア案内記』によれば、オリュンピエオン周辺にはさまざまな神殿が立ち並び、都市の新たな中心となることが意図されていたといえる。オリュンピエオンの北西角には「ハドリアヌスのアーチ」が立ち、旧市街とハドリアヌスの開発地域とを象徴的に分けていた。アウグストゥス帝期より後、大建築物がほとんど造られなくなり、ローマ中央からの関心も低下していたアテナイは、ハドリアヌス帝の時、大きく

その状況を変えたのである。⁽¹⁾

しかし、ハドリアヌス帝のアテナイ「復興」は、単にこれらの建築物造営にあっただけではなかった。当時のギリシア文化圏におけるアテナイの位置づけそのものを変え、この都市を属州アカイアの一都市からギリシア世界の中心都市のひとつへと発展させることも意図されていた。パンヘレニオンの創設である。文字通りの意味では「全ギリシア」という名であるこの組織は、東地中海の諸都市が加盟した「都市同盟」であり、アテナイはその盟主的位置に置かれたと一般に理解されている。筆者は、前稿にてこの組織について検討した結果、創設の中心意図は「同盟」構築ではなく、アテナイをギリシア世界の一大中心都市として活性化させることにあつたと論じた。⁽²⁾ すなわち、全ギリシア世界、またはエーゲ海周辺域の都市が同盟を組み、ギリシア世界の一体感を促進させるといった、先行研究が強調してきたことにハドリアヌス帝の主眼はなかった。むしろ、この同盟創設には、アテナイのための人的資源確保という側面が強かったことを明らかにしたのである。パンヘレニオン加盟都市は一人もしくは複数のパンヘレネスを選出してアテナイに派遣した。彼らはアテナイにてシュネドリオン

窓（評議会）を開き、パンヘレニア祭をはじめとするさまざまな活動を行ったが、それらを展開すること自体がパンヘレニオンの存在理由だったのである。

では、パンヘレネスはアテナイのどの地域に集ってこうした活動を行ったのか。つまりパンヘレニオンが本拠とした建築物はどこだったのか。これは、ハドリアヌス帝のアテナイの基本的性格にも関わる重要な問題であり、先行研究は議論を重ねてきたが、いまだ決着をみていない。本稿は、この問題をめぐる研究史の整理から出発して、ハドリアヌス帝のアテナイ「復興」に弁論家ヘロデス・アッティクスの家系がいかに大きく関わっていたかを明らかにすることを目的とする。

第一章 アテナイとパンヘレニオン

パンヘレニオンが本拠とした建築物については、ごくわずかな文献史料がきわめて曖昧にしか述べておらず、しかもその内容が考古学調査の結果とうまく一致しないため、大いに問題となってきた。⁽³⁾ パウサニア『ギリシア案内記』はアテナイのトポグラフィを詳細に説明しているが、その中で、パンヘレニオンに関連していると思われる神殿に言及している。ハドリアヌス帝によるアテナイの諸々の建築物について述べている部分で、パウサニアは、帝がアテナイ人のために、「ヘラとゼウス」パンヘレニオスの神殿とかあらゆる神々のための共同の聖所 (ναὸν Ἱερῶν καὶ Διὸς Πανελληνίου καὶ θεῶν τοῦς ἄλλοις ἱσθῶν κοινῶν) を建てたと記しているのである。⁽⁴⁾ この神殿が、ゼウスとヘラそれぞれの神殿を指すのか、両者が祀られた神殿ひとつを指すのか、

ギリシア語の文言からははっきりしないが、ともかくゼウス神の添え名が「パンヘレニオス」であることから、ここがパンヘレニオン同盟の本拠であったと古くから考えられてきた。⁽⁵⁾ また、二世紀末から三世紀初頭にかけての歴史家ディオ・カッシウスは、ハドリアヌス帝がギリシア人にパンヘレニオンという聖域の建設を許可し、また、それに関連する競技祭を設立したと述べているが、このパンヘレニオン聖域がパウサニアの言うゼウス「パンヘレニオス神殿と同じものなのだと見なされてきた。⁽⁶⁾

だが、パウサニアのゼウス「パンヘレニオス神殿が具体的にどの建築物であるのかは、判明していない。J. Travlos は、オリュンピエイオンの南、アポロン「デルフィニオス神殿に隣接する建築物をこの神殿と同定したのであるが、⁽⁷⁾ パンヘレニオンについて画期的な論文を共同で著した A. J. S. Spawforth と S. Walker は、この神殿で祀られていた神が定かでないことを指摘し、ゼウス「パンヘレニオス神殿であるかは分からないと見解を留保した。⁽⁸⁾ さらに二人は、ゼウス「パンヘレニオス神殿以外にもパンヘレネスが集会所を有していた可能性を示唆し、パウサニアが言うところの「パンテオン（あらゆる神々のための共同の聖所）」と同定されている建築物こそが、パンヘレニオンの本拠であったのではないかと論じた。この「パンテオン」は、「ハドリアヌスの図書館」の東方に位置するのであるが、二人の考えの根拠は、「パンテオン」が、発掘された遺構からは神殿であるとは認定できない一方、規模の点でパンヘレネスたちが集まるに充分であるという点であった。⁽⁹⁾

この説は多くの賛同を得たが、それに対して、D. Willers はまったく

く異なる見解を主張した⁽¹⁰⁾。彼は、SpawforthとWalkerと同じく、オリュンピエイオンの南にある建築物がパンヘレニオンに關係することを否定したが、それだけでなく、パンヘレネスの拠点はオリュンピエイオンであつたという革新的な考えを打ち出したのである。彼によれば、パウサニアスはゼウス＝パンヘレニオス神殿とオリュンピエイオンとを混同しており、また、ディオはオリュンピエイオンを指してパンヘレニオンと呼んだのである。実際、ハドリアヌス帝は、ゼウス神と同一視させようという意図から、オリュンピオス、パンヘレニオス両方の添え名を付けて碑文に記されていることが多く、オリュンピエイオンとパンヘレニオンが同一のものを指すという見解には根拠がないわけではない。そこで、このWillersの斬新な説はそれなりの賛同を得たが、オリュンピエイオンをパンヘレニオンと同一視する直接の根拠はないとして、疑問の声も根強い⁽¹¹⁾。

さらに、C. P. Jonesは新たな見解を提示した⁽¹²⁾。彼は、問題の建築物にパウサニアスが「神殿」*ναός*、ディオが「聖域」*οἶκος*と異なる単語を用いていることから、両者が違うものに言及していると考え、ディオの言うパンヘレニオンこそがパンヘレネスの本拠地であり、パウサニアスの言うゼウス＝パンヘレニオス神殿はまったく關係ない建築物なのだとする。その上で彼は、ディオのパンヘレニオンに該当する建築物は、アテナイ都市部ではなく、郊外のエレウシスにあつたのだと唱えた。

エレウシスは、その秘儀が古え以来連綿と続いていた地域である。後二世紀にはその評判はローマ世界全体に知れ渡り、ハドリアヌス帝も入信したことが知られる。この地がパンヘレネスの活動と深く結び

ついていたこと自体は早くから判明していたが、とりわけ前述のSpawforthとWalkerの論考以来、エレウシスとのつながりは脚光を浴びてきていた。K. Clintonも指摘するように、エレウシスはハドリアヌスからマルクス帝期にかけて大改修されたのであるが、その時パンヘレネスがローマ皇帝とエレウシスの二柱の女神に捧げるアーチを二つ奉獻したのである⁽¹³⁾。奉獻の正確な年代は議論があるが、オリュンピエイオン北西の「ハドリアヌスのアーチ」ときわめて類似した形状であつた。また、パンヘレネスは二柱の女神に初穂を捧げていたことも知られている。こうした先行研究の成果に基づいて、Jonesは一步さらに進めた見解を示したのである。

彼の説はSpawforthやR. Etienneなど多くの研究者の支持を得、有力なものとなりつゝあつた⁽¹⁴⁾。Spawforthは、エレウシスの二つのアーチが、ディオの言うパンヘレニオン聖域以外では、パンヘレネスの直接関与がはっきりしている唯一の公共建築物であることに注意を促し、加えて、エレウシスの秘儀が当時ギリシア世界で広く尊崇を受けており、また、アテナイこそを中心とする発想につながることから、ハドリアヌスがエレウシスの女神崇拜とローマ皇帝崇拜とをパンヘレニオン同盟の中核としようとしたのだらうと述べる。

ところが、S. FolletとD. Peppas-Delmonsonによるテュアテイラ碑文の再構成を受け、Jonesはその後、自説を変えた⁽¹⁵⁾。テュアテイラ市のパンヘレニオン加盟について記したこの碑文は、アクロポリスに本来設置されていたものであるらしい。しかも、この碑文だけでなく、サルデイスやシユンナダといった他都市の加盟に関する碑文も同所に置かれていた可能性が高い。そこでJonesは、ディオの言うパンヘレ

ニオンはエレウシスにはなく、アテナイのアクロポリスにあったのだと、これまでとは異なる見解を打ち出したのである。⁽¹⁶⁾

このように、パンヘレニオンがアテナイのどこを拠点としていたのか、さまざまな場所が推測されてきている。いずれも状況証拠の積み重ねであり、基本的にはどの立場も決定的なことは打ち出せていない。ただ、いずれもそれなりの説得力を有しているのも事実である。オリュンピエイオンの南にある構造物がパンヘレニオンであるという可能性はかなり低くなってきているが、最有力視されているエレウシスはもちろんのこと、オリュンピエイオンとパンヘレニオンを同一視する Willers の見解も、それ自体はあまり賛同されなくなったもの、見るべき点が多い。パウサニアスによれば、オリュンピエイオンには、アテナイ人が「植民市」(ἀποικίους πόλεις) と呼んでいる青銅像 (χρυσάνθη) があり、また、各「都市」(πόλεις ἐκείνης) から一体ずつのハドリアヌス像が捧げられていた。⁽¹⁷⁾ これらの「植民市」や「都市」がパンヘレニオン加盟都市を指している可能性はきわめて高い。また、オリュンピエイオンを完成させることには、前六世紀からのアテナイの歴史をハドリアヌス帝やローマ帝国が引き継ぐという意味があった。⁽¹⁸⁾ 同一視できなくとも、オリュンピエイオンがパンヘレネスの活動に密接に関係していたものであったことは確実であろう。

このオリュンピエイオン説に典型的に見られるように、さまざまな解釈が出現する理由は、単にパウサニアスが曖昧な言及をしているということや、考古学調査では建築物の性格の完全同定が難しいということだけにあるのではない。パンヘレネスが関わっている地域や建築

物がひとつではないことにも多くを負っている。すなわち、たとえシユネドリオンがどこかひとつの場所に置かれていたとしても、パンヘレネスは「古のアテナイ」と縁の深いさまざまな地域と結びついて建築物奉獻や碑文建立などを行っていたのであり、どこかひとつが彼らにとつてとくに重要であったとは特定できないことを示しているのである。

パンヘレネスの活動のこのような性格は、本稿冒頭で筆者が述べたように、パンヘレニオンの創設理由がアテナイ活性化であったとすれば、当然のことといえる。パンヘレニオンは単にアテナイに本部を置いていただけではなく、アテナイを全面的に改造し、「復興」させる役割を担っていたのである。彼らの活動がアテナイ全体に及ぶことで、ハドリアヌスの個々の建築物は有機的に結び付けられ、また同時に古のアテナイとハドリアヌスのアテナイとが連続性をもって「接続」されたといえる。パンヘレネスの活動は、ハドリアヌス帝期だけではなく、それ以降にも引き続き行われた。⁽¹⁹⁾ そうして、ピウス、マルクス帝期と時代を重ねるにつれ、一層アテナイは「文化首都」として整備されていった。ハドリアヌスのアテナイ「復興」は、一過性の場当たり的なものではなく、きわめて入念に計画され、また地元根ざした存続性を有していたのである。

ところが、この「復興」については、一般に帝自身のギリシア文化趣味と、それゆえの強いイニシアティヴが強調される傾向にある。だが、常にアテナイに滞在したわけではないハドリアヌス帝が、都市景観にとどまらない、アテナイのさまざまな要素を取り込んで行なわれた「復興」にどれほど関与できたのか。これに関して、前述の Jones

Spawforthの議論は興味深い。詳細は既に前稿で述べたのでここでは省くが、パンヘレニオン創設を誰が主導したのかをめぐってJonesがハドリアヌス帝ではなく小アジアのギリシア人の役割を強く主張し、Spawforthはそれに対して厳しく反論したのである。結局、テュアテイラ碑文の復元からハドリアヌス帝の主導が明らかとなったため、Jonesの主張はあまり顧みられていない。だが、Jonesが指摘するように、ハドリアヌス帝にすべてを帰す傾向には疑問を呈さざるをえない。この点については実はSpawforthも、ハドリアヌス帝がパンヘレニオン創設を發案する際に、側近であるギリシア本土初の元老院議員、すなわち、スパルタ出身のガイウス・ユリウス・エウリュクレス・ヘルクラヌス（以下、ヘルクラヌス）とアテナイ出身のティベリウス・クラウディウス・アッティクス・ヘロデス（以下、アッティクス）の二人と意見を交換した可能性は大いにありうると認めているのである。⁽²¹⁾

彼らの認識は、アッティクスの経歴が近年再検討されたことを反映していると思われるが、しかし、ハドリアヌスのアテナイ「復興」とアッティクスとを十分に結び付けて考えることはできていない。そこで、次章ではアッティクスに焦点をあて、彼が果たした役割を詳しく検討していく。

第二章 アッティクスとハドリアヌス

第一節 アッティクスの経歴の変化

従来の研究は、アッティクスという人物にあまり注目してこなかった。

この要因としては、彼の同名の息子ティベリウス・クラウディウス・ヘロデス・アッティクス（以下ヘロデス）の存在感の大きさが挙げられる。ヘロデスは当代随一の弁論家、第二ソフィストの代表格として名高い人物であった。マルクス・アウレリウス帝の少年時代の修辞学教師にもなり、後まで帝から敬意を持って遇され、一四三年の正規コンスルでもあった。ローマ期のギリシア世界に関する現存文献史料は元々少ない上に、当時は「ギリシア・ルネサンス」華やかかりし頃であり、第二ソフィストたちを最上とする価値観のものが多く、この時代のギリシア人の心性を知るには第一級の史料であるフィロストラトス『ソフィスト列伝』は、ヘロデスをまさに時代を画す存在とし、同時代のソフィストたちの筆頭として伝を立てている。アッティクスはあくまでもヘロデスの父として、背景的に描かれるだけなのである。このような同時代の扱いを反映して、現代の研究者の目もヘロデスに向きがちである。彼についてはP. Grandorによる二〇世紀前半のものに嚆矢として、W. AmelingやJ. Tobinによるものなど、伝記研究が盛んである一方、アッティクスの方はヘロデスの前世代として簡単にしか触れられない。⁽²²⁾アッティクスが果たした役割を当時のローマ帝国やギリシア世界の中に位置づけようという試みは乏しいのである。彼は息子ヘロデスの陰に埋もれてしまった観が強い。

この状況をさらに進めることとなったのが、アッティクスの経歴についての近年の大幅な修正である。従来、アッティクスはトラヤヌス帝期に元老院議員身分に特別編入 (adlectio) されて一〇八年にコンスルに到達し、その後、年代は不明ではあるものの二回目のコンスルにもなったのだと見なされていた。ギリシア本土初の元老院議員かつ

二度のコンスルとして、詳細は不明なもの、中央政権でかなりの位置にいたとは考えられていたのである。だが、新史料の発見により、アッティクスのコンスル年は一三二年に引き下げられ、A. R. Birley はこの点に着目した。⁽²⁴⁾ 彼はアッティクスの経歴を見直し、元老院議員身分への特別編入はハドリアヌス帝期であり、トラヤヌス帝期にはプラエトル格顕彰 (Ornamenta praetoria) を受けはしたものの未だ元老院議員ではなかったと論じたのである。Birley は、従来アッティクスが就いたと考えられていたトラヤヌス帝期のユダヤ総督職についても、別人のものであったとして否定し、コンスル職も一三二年の一回のみとした。

もともとアッティクスの二度目のコンスル職就任については疑わしいと考えられていたこともあり、Birley の見解はほぼ受け入れられたようであるが、⁽²⁵⁾ 併せて彼は、アッティクスの息子ヘロデスの経歴にも検討を加えて、この人が父とほぼ同時か、それより前から元老院議員身分経歴を歩み始めていた可能性を示唆した。⁽²⁶⁾ とくに Birley は、ヘロデスのクアエストル職が碑文では「友臣中の (Inter amicos)」と記されており、⁽²⁷⁾ ハドリアヌス帝との特別に近い関係を示していることを強調したのである。⁽²⁸⁾

こうして、アッティクス像、さらには父子とハドリアヌス帝の関係についての認識は大きく変わった。アッティクスはトラヤヌス帝期にはアテナイの地方有力者にすぎず、ハドリアヌス帝期になっての元老院議員身分入りも息子とともに受けた名誉であったことになり、以前にもましてヘロデスに従属した存在と位置づけられてしまったのである。Birley は、ハドリアヌスがパンヘレニオン計画を練った相手とし

ても、アッティクスとヘロデスの役割を同等に見る。⁽²⁹⁾

たしかにヘロデスもアッティクスも元老院議員になった時期は定かではないとはいえ、父より息子が先に元老院議員となったとする Birley の示唆に明確な根拠はない。むしろ、トラヤヌス帝期にアッティクスが地方有力者であるにもかかわらずプラエトル格顕彰を受けたことに着目すべきである。というのも、Birley は充分触れないが、実はアッティクスとハドリアヌスとの関係は、ヘロデスとハドリアヌスとのそれよりずっと早い時期、トラヤヌス帝期から形成されていた可能性が高く、また、そのことは、アッティクスがハドリアヌス帝のアテナイ「復興」に果たした役割に新たな光を当てるものでもあるからである。次節以降ではこの点について詳しく考察する。

第二節 トラヤヌス帝期のアッティクス

アッティクスの家系は、祖先がミルティアデス、キモンといった古典期の有力者、さらには伝説上のアイアコス一族にまで遡れると主張する名門であり、またアテナイにおけるローマ皇帝崇拜を代々司つて⁽³⁰⁾ もいた。ところが、アッティクスの父ヒッパルコス、フラウイウス朝の諸皇帝から睨まれ、ドミティアヌス帝によって財産没収を受け、没落してしまった。七〇年頃に生まれていたアッティクスも、スパルタにて亡命生活を送る羽目に陥った。その状況が、ドミティアヌス帝が暗殺され、ネルウアが新たな皇帝となって以降、変化した。アッティクスはアテナイに戻り、ネルウア帝から財産回復を承認されて勢力を揚げ始めたのである。⁽³¹⁾ フィロストラトスによれば、アッティクスはネルウアとの再三の書簡のやり取りで財産所有を認められている。

ネルウアの短い治世が終わりトラヤヌスが皇帝となつてからは、一族が就いていた皇帝崇拜の神官職にも返り咲いた。⁽³²⁾

この頃、ローマ中央では、ギリシア文化の発祥の地である本土、とりわけアテナイへの関心が高まり始めており、そのような中アテナイを訪れたのが、トラヤヌス帝の親族で、まだ一元老院議員にすぎなかつたハドリアヌスである。彼は少年時代からグラエクルスというあだ名をつけられるほどギリシア文化に傾倒していたが、トラヤヌス帝期の一—一—二二—二二年にアテナイを訪れてその市民権を得、さらにはアルコン・エポニモスやディオニュシア祭のアゴノテテスとなり、エレウシスの秘儀にも入信した。⁽³³⁾ 非ギリシア文化圏出身者としては異例なほどにアテナイに関わつたのである。自らの憧れを具現化させることに成功したといえよう。

筆者が既に一連の論考で明らかにしたように、このハドリアヌスの行動の背景には、当時の中央政界における変化があつた。⁽³⁴⁾ それまで西部出身者が支配的であつた元老院議員身分内、トラヤヌス帝期には、小アジア、シリアのギリシア文化圏出身者が一大勢力を形成するようになっていた。彼らは、政治的・経済的に立ち遅れているが、文化的に伝統を有すギリシア本土に対して、憧れと軽蔑とが混じり合つた微妙な感情を有していた。そのような人々のうち、いち早くアテナイへの憧れを具現化させたのが、コンマゲネ王家出身で、一〇九年のコンスルのフィロパップスであつた。元老院議員時代のハドリアヌスは、このフィロパップスを師と仰ぎ、彼を範としてアテナイに関わつていたのである。

このようなハドリアヌスと、アッティクスが交流を持たなかつたと

は考えにくい。まず、前述したようにアッティクスのアテナイにおける地位はトラヤヌス政権に多くを負つており、帝の親族を無視したとは思えない。しかも、アッティクスは、スパルタのヘルクラヌスの家系を通じてフィロパップスの遠縁であつた。⁽³⁵⁾ フィロパップス自身、当時ギリシア文化圏出身元老院議員間で成立していた親族集団に属しており、この親族集団はトラヤヌス帝の有力な支持基盤であつた。アッティクスはその末端に位置しているともいえ、そもそも彼の家系の名誉回復すらこの集団の影響力故だつたのかもしれない。さらに、アッティクスの家系は、エレウシスの神官を務めた氏族(ゲノス)であるケリユケスの一員であつた。⁽³⁶⁾ 彼については直接の証拠はないものの、息子ヘロデスは後にマルクス帝に入信の導師役を要請されてもいる。⁽³⁷⁾ ハドリアヌス、フィロパップスともにエレウシスの秘儀に入信していることを考慮すると、そこにアッティクスが何らかの役割を果たした可能性はきわめて高い。

初代アウグストゥス帝より後、一〇〇年近くローマ中央の関心を受けず、ギリシア文化圏での位置も著しく低下していたアテナイに対して、トラヤヌス帝期のローマ中央やギリシア文化圏は強力にアプローチをかけ始めていた。アッティクスは、まさにそうしたアプローチの受け入れ役として存在感を高めていたのである。その一部にハドリアヌスとの交流もあつたのであろう。

前節で述べたトラヤヌス帝からアッティクスへのプラエトル格顕彰は、どの時点での授与であるのかは議論があり、確定することはできないが、このような文脈の中で授与されたと見なすべきである。

Briegerは、トラヤヌス帝が、バルティア戦争に赴く途中の一—一三年、

アテナイに立ち寄り、アルメニア王からの使節に謁見した時の授与だと考え、⁽³⁷⁾「Joubertはネルウアかトラヤヌス帝期とする。いずれも、その特別さに目を向けない。だが、この顕彰授与は、被授与者がローマ中央にとって明確な価値を有していたことを意味しており、アテナイ有数の富裕者であったことや皇帝の滞在を世話したことだけが理由とは考えにくいのである。⁽³⁸⁾」

こうして、少なくともトラヤヌス帝期末には、アッティクスはローマ中央との強い紐帯に裏打ちされた、アテナイで抜きん出た実力者となっていた。単なる大富豪ではなかったのである。

第二節 ハドリアヌス帝期のアッティクス父子

ハドリアヌス帝期におけるアッティクスおよび息子ヘロデスの元老院議員身分入りは、このような状況の中に置いて考えねばならない。ヘロデスは一〇〇年頃の生まれであるが、その後、本章第一節で挙げた碑文からは、ハドリアヌス帝期に彼がクアエストル、護民官、プラエトルと元老院議員経歴を重ねていったことが確認できる。Amelingは、クアエストル職就任を一二九九年に置き、その後の公職就任をそれぞれ一三一年、一三三年とした。

一方、Brileyはヘロデスのクアエストル職就任を一二四年、以下一二八、一三〇年とかなり早めて考える。⁽³⁹⁾フィロストラトスによれば、少年時代のヘロデスは、即位直後のハドリアヌスの面前での弁論に失敗したが、Brileyはこの出来事直後にヘロデスが帝に気に入られて元老院議員身分に入ったとし、ハドリアヌスとの個人的つながりを強調する⁽⁴⁰⁾のである。だが、根拠に乏しい。ヘロデスはアテナイで一二五年

にアゴラノモス、一二六／七年にアルコン職に就いており、⁽⁴¹⁾ローマとの間を頻繁に行き来することになるという不自然さも生じる。ヘロデス個人とハドリアヌスとの関係ももちろん否定はできないが、父や親族の影響を無視することもまたできない。これまで見てきたようにアッティクスと皇帝家とのつながりがきわめて強いことを考慮すると、アッティクスが、アテナイで構築した土台をもとにヘロデスを中央に出したと見る方が自然である。ヘロデスが「友臣中のクアエストル」とされた理由も個人的好意からと見るよりも、前節で論じたアッティクスやその親族集団とハドリアヌスとの交友が背景にあったのであろう。では、アッティクスの方は、なぜ元老院議員身分とされたのか。

前述の経歴再構成を踏まえると、ハドリアヌス帝期におけるアッティクスの位置づけはさらに変化する。彼は、元老院議員として一三二年のコンスル職以外、目立った職務に就いていないことになるのである。⁽⁴²⁾その一方で、アテナイにおいては彼の顕著な施与行為を確認できる。ディオニュシア祭の度に市民に大盤振る舞いをし、諸部族にもさまざまな恩恵を施し、市民からも多く顕彰されている。死に際してはアテナイ市民に一ムナを贈ることを遺言した。⁽⁴³⁾基本的にはハドリアヌス帝期になっても彼の活動のあり方は変わらず、アテナイに深く根付いたものであり続けているといつてよい。元老院議員身分に上昇された後も、彼は一貫してアテナイこそを活動の舞台としていたのである。そうした活動のハイライトとでもいえることに、一三一／二年、彼は、ハドリアヌスが完成させたオリュンピエイオン神官職に就任した⁽⁴⁴⁾おそらく完成するまでの建築活動にも深く関与し、落成式も差配したのであろう。

第一章で見たように、パンヘレネスの活動を窺える地域は、アテナイの中でもとりわけエレウシスとオリュンピエイオンであった。アッティクスは両方に深く関わっていたことになる。これは、彼のアテナイでの力を考えてみても、偶然の一致とは考えにくい。彼はハドリアヌス帝期に入ってから、帝のアテナイ「復興」活動を、現地に支えていくような役割を任されていたのではないか。アテナイを三度も訪問したとはいえ、ハドリアヌス帝は常にアテナイに関わることができたわけではない。前節での考察を踏まえると、小アジア・シリア出身元老院議員たちを通じて以前から自身や皇帝家とつながりがあり、エレウシス神官家系に属して「古のギリシア」とも関係が深いアッティクスは、皇帝となったハドリアヌスにとってアテナイ「復興」計画にうってつけの人材であった。元老院議員身分への上昇もそのためであったとすると納得がいく。アテナイにおいて皇帝の代理的役割を果たすための権威づけが、元老院議員身分への特別編入措置であり、一三二年のコンスル職は、彼の活動への報奨だったと考えられるのである。この年がオリュンピエイオン完成とパンヘレニオン始動の直後であることは意味深い。

先行研究は、彼がアルコン職やストラテゴス職などに就いていないことだけをもって、アッティクスがアテナイ市民に施与行為はしたものの、政治的活動はあまり行わなかったと見なす傾向にある⁽⁴⁵⁾。だが、当時のローマ支配下のアテナイにてこれらの役職には所詮大きな政治的意味はない。また前述のように彼は皇帝崇拜に関する役職には就いているのである。アッティクスが、ローマ皇帝側に属す存在としてアテナイ「復興」を円滑に進めたことは、アルコン職などに就かなかつ

たこととは矛盾しないのである。

もつとも、アッティクスがアテナイ市内の建築物に直接関わった証拠は、オリュンピエイオン以外にはない。だが、Johmが推測するよう⁽⁴⁶⁾に、アッティクスは父ヒツバルコスの没落を受けて、自らがアテナイの「テュランノス（僭主）」と呼ばれないよう注意深い態度を取っていた可能性が高い。また、ハドリアヌス帝の代理としての活動である以上、自身の名を出す必要はないのである。M. Clintonによれば、ヘロデスはマルクス帝期におけるエレウシスの諸々の建築活動については自分の名を出さず、マルクス帝の名を優先させた⁽⁴⁷⁾。テュランノスとされ、アテナイ市民としばしば衝突したヘロデスですらそうなのであるから、市民からの評判に配慮していたアッティクスについても同様のことをあてはめることができよう⁽⁴⁸⁾。

以上をまとめると、次のようになる。ハドリアヌス帝期におけるアッティクスとヘロデスの元老院議員入りはどちらが先かは確定しがたいが、いずれにせよヘロデス中心に見る必要はない。その背景にあったものは、トラヤヌス帝期以来の、アッティクスとハドリアヌスとの関係であった。ハドリアヌスが皇帝となったことで、アッティクスとローマ中央との距離はますます縮まった。アッティクスは息子を皇帝の元へ送って元老院議員経歴を歩ませ、その一方で、自分自身は皇帝の代理の元老院議員身分として、アテナイ「復興」を差配したのである。

これにより、ハドリアヌス帝がアテナイ「復興」事業を進める環境はさらに整えられていった。ローマ中央にヘロデスが、アテナイにアッティクスがいることで、アテナイ「復興」に帝の意志をすみやかに

窓に反映し、実行することが可能となったのである。その意味では、Spawforthが言うような、ハドリアヌス帝のそば近くに控え、彼からパンヘレニオン構想について意見を求められる役どころにいたのは、アッティクスではなく、ヘロデスであった。だが、彼はあくまでも父の補佐的存在であり、アッティクスとハドリアヌスとの関係こそがアテナイ「復興」の中核に位置したのである。実際、フィロストラトスは、一三五年頃にヘロデスが属州アジアのコツレクトルとして起こした財政問題を描く際、ハドリアヌス帝に、ヘロデスではなくアッティクスに対して不満を述べさせている。フィロストラトスの記述を文字通りに受け取るわけにはいかないが、少なくとも彼がみるどころではアッティクスが帝にとってヘロデス以上に近い間柄であったからこそ、このような描写をしたのであろう。⁽⁴⁹⁾

以上のような本稿の議論は、ハドリアヌス帝期より後のアテナイの状況にも一致する。アッティクスは、ハドリアヌス帝とほぼ時を同じくして一三八／九年かそれ以降に死亡したと考えられている。⁽⁵⁰⁾この頃ヘロデスは、元老院議員経歴を中断してアテナイに戻り、第二回パンヘレニア祭のアゴノテテス職と、ハドリアヌス帝が再編したパンアテナイ祭のアルコン職に就き、スタディオンを建設するなど、精力的な活動を展開した。⁽⁵¹⁾ヘロデスのこの動きは、父の死を受け、アテナイでの役割を引き継ぐためであったと見なすと、きわめて符丁が合うのである。

おわりに

トラヤヌス帝期からハドリアヌス帝期にかけて、アッティクスは、

アテナイ「復興」の基盤を整備すると同時に、自らの家系とローマ中央との関係を強化していった。それを継承し、土台として名を挙げたのがヘロデスであった。ハドリアヌスとヘロデスの二人が、当時のギリシア世界においてあまりにも名高く、存在感があるために、「テュランノス」ではないことを志向したアッティクスの役割は充分に理解されてこなかったといえるだろう。

従来、ハドリアヌス帝のアテナイと、それより後のアテナイとは断絶が前提とされてきた。ピウス帝以降、アテナイに造られた二つの大建築物、すなわちパンアテナイ祭のスタディオンと、レギッラ記念オディオンは、いずれもヘロデスの手によるものであり、ピウスやマルクス帝の手によるものではない。そこで、アテナイの「復興」は、ハドリアヌス帝期には中央の皇帝自らが主導したものの、それより後は、ヘロデスというアテナイ出身元老院議員によるものへと変化したとして、主体の差が強調される。たとえば「*John*」も、ヘロデスが建築活動の範としたのはハドリアヌスであり、父ではなかったとする。⁽⁵²⁾

しかしながら、本稿で論じてきたように、アッティクスこそがハドリアヌス帝期のローマ中央とアテナイとの「要」であったとすると、ハドリアヌス帝期とそれより後の時代の間には、強い連続性を看取することができるのである。すなわち、二世紀アテナイの「復興」は、アッティクス父子というギリシア側の底流によって——その関与の仕方異なるもの——支えられたといえる。ローマ皇帝からのイニシアティブの有無に囚われない、長期的な視野の下で理解せねばならないのである。それでは、ハドリアヌス帝期より後、ローマ中央とアテナイの関係は、具体的にはどのように展開していくのか。今後の課題

としたい。

註

- (1) ハドリアヌス帝期のアテナイ都市景観の変容については、南川高志「ローマ帝国とギリシア文化」藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』(南窓社、一九九三年)、七七一—〇八頁。
- (2) 桑山由文「ローマ帝国とパン・ヘレニオン」『古代文化』六二—二〇一〇年六月)、八二—八九頁。
- (3) パン・ヘレニオンそのものについても、文献史料がほとんど触れないため、アテナイや加盟都市からの出土碑文に基づいて再構成せざるをえず、断片的な情報しか分かっていない。桑山、前掲論文、八二頁。
- (4) Pausanias, I, 18, 9. 訳文は、馬場恵二訳『ギリシア案内記(上)』(岩波文庫、一九九一年)による。
- (5) J. Travlos, *Pictorial Dictionary of Ancient Athens*, London, 1971, 429; A. J. S. Spawforth & Walker, S., *The World of the Panhellenion*, I Athens and Eleusis, *JRS*, 75, 1985, 94.
- (6) Dio Cassius, 69, 16, 2. 「ハドリアヌスは、彼自身の聖域——パン・ヘレニオンと呼ばれてゐる——を建てることをギリシア人に許可し、それに関する競技祭を設けた」(桑山、前掲論文、八五頁)。
- (7) A. Benjamin, *The Altars of Hadrian in Athens and Hadrian's Panhellenic Program*, *Hesperia*, 32, 1963, 59; Travlos, op. cit., 429.
- (8) Spawforth & Walker, op. cit., 94.
- (9) Spawforth & Walker, op. cit., 97-98.
- (10) D. Willers, *Hadrian's panhellenisches Programm*, Basel, 1990.
- (11) A. R. Birley, *Hadrian, the Restless Emperor*, London & New York, 1997, 344; Mitchell, *BJ*, 192, 1992, 718-722; Willers 説に基本的に賛同するが、M. T. Boatwright, *Hadrian, Athens and the Panhellenion*, *JRA*, 7, 1994, 426-431¹⁴ 反対する。
- (12) C. P. Jones, *The Panhellenion*, *Chiron*, 26, 1996, 32-33 et 36.
- (13) IG II² 2958, K. Clinton, *Roman Initiates and Benefactors I. Second Century BC-AD 267*, *ANRW*, II, 18-2, 1989, 1519.
- (14) Spawforth, *Panhellenion Again*, 347; R. Étienne, *Athènes, espaces urbains et histoire*, *Des origines à la fin du III^e siècle ap. J.-C.*, Paris, 2004, 194.
- (15) C. P. Jones, *A Decree of Thyatira in Lydia*, *Chiron*, 29, 1999, 15-16; S. Follet & Peppas Delmousoy, D., *Le décret de Thyatire sur les bienfaits d'Hadrien et le «Panthéon» d'Hadrien à Athènes*, *BCH*, 121-1, 1997, 291-309; 桑山、前掲論文、八五—八六頁。
- (16) シュンナタの碑文には「我々はあらゆる神々に祈る」との文言があげられている。Follet & Peppas-Delmonousou, op. cit., 306-308は、パウサニアスの言の「パンテオン」に設置されたとするが、Jones はそれは否定する。
- (17) Pausanias, I, 18, 6. 発掘調査では、「植民市」像の痕跡は見つかっていない。ex. Boatwright, *Hadrian and the Cities of the Roman Empire*, Princeton, 2000, 153, n. 34.
- (18) クリストファー・ケリー著、藤井崇訳「古代ローマ帝国」(岩波書店、二〇一〇年)、七八—八三頁。
- (19) 桑山、前掲論文、八六—八八頁。
- (20) 桑山、前掲論文、八五—八六頁。
- (21) Spawforth, *Panhellenion Again*, 342.
- (22) P. Grandor, *Un Milliaire antique: Herode Atticus et sa famille*, Cairo, 1930; W. Ameling, *Herodes Atticus I. Biographie. II. Inschriftenkatalog*, Hildesheim, 1983; J. Tobin, *Herodes Attikos and the City of Athens*, Amsterdam, 1997.
- (23) M. Pietsch, *Ein neues Militärdiplomfragment aus Bad Wimpfen*, *Fundberichte aus Baden-Württemberg*, 15, 1990, 247-263. マンティクスの経歴復元の意義については、桑山由文「元首政期ローマ帝国におけるギリシア世界の変容——東部出身元老院議員の台頭とアテナイ」笠谷和比古編『公家と武家IV 官僚制と封建制の比較文明史的考察』(汲古閣出版、二〇〇八年)所収、四三三頁。
- (24) Birley, *Hadrian* 338, Id., *Hadrian and Greek Senators*, *ZPE*, 116,

- 1997, 209-245.
- (25) Arneling, op. cit., 27. & H. Halfmann, *Die Senatoren aus dem östlichen Teil des Imperium Romanum bis zum Ende des 2. Jh. n. Chr.*, Göttingen, 1979, no. 27. 44. マンティクスは二度目のコンヌル職に就任。Birley の誤解に従って *ex M. Gleason, Making Space for Bicultural Identity: Herodes Atticus Commemorates Regilla*, T. Whitmarsh (ed.), *Local Knowledge and Microidentities in the Imperial Greek World*, Cambridge, 2010, 127.
- (26) Birley, *Greek Senators*, 236.
- (27) *Syll*³ 863 no. 1.
- (28) Birley, *Greek Senators*, 218, 229-237.
- (29) Birley, *Greek Senators*, 237.
- (30) Philostratus, *VS*, 545-547. 彼の血統は、前2世紀まで遡って確認 *καταγοναξιότητος*。Tobin, op. cit., 13-14; Etienne, op. cit., 207-208.
- (31) Philostratus, *VS*, 547-548. マンティクスが「財宝」を「発見」したことをフィロストラトスは伝えるが、現実にはこれは父ヒッパルコス の隠し資産であり、「発見」したという体裁をアッティクスが取ったのであろうと考えられている。Tobin は、この財宝が、アッティクスの所有していた複数の邸宅のうちのひとつとフィロストラトスが述べていることから、彼の財産はすでにネルウァ帝によって回復されていたのだらうと指摘する。
- (32) *AE*, 1950, 34; 1973, 493.
- (33) この時の入信がいつまで本格的なものであったのかは議論がある。Clinton, op. cit., 1517; Birley, *Hadrian*, 175.
- (34) 桑山由文「ローマ帝国東部の発展と王家の記憶——フアラウィウス朝から五賢帝期へ——」『西洋史研究』新輯三〇（二〇〇一年一月）四一—六三頁。桑山「ギリシア世界の姿容」四一—八—四四頁。
- (35) 桑山「ギリシア世界の姿容」四二—四四頁。
- (36) Philostratus, *VS*, 545-547.
- (37) Philostratus, *VS*, 563.
- (38) Birley, *Greek Senators*, 236; Tobin, op. cit., 19. プラエトル格顕彰の性格については、桑山「元首政期ローマ帝国における近衛長官職の確立」『史林』七九—二（一九九六年）二九—三三頁。
- (39) Birley, *Greek Senators*, 236.
- (40) Philostratus, *VS*, 565.
- (41) *Antoninean* の *IG II² 3602*; Arneling, op. cit., II, 1983, no. 71. *Antoninean* の *IG II² 3190*; 3733 etc.; Arneling, op. cit., II, 1983, no. 72-4; Tobin, op. cit., 24.
- (42) 祭儀執行に五人役には就いているが、これも一三〇年代と考えられよう。Birley, *Greek Senators*, 229-230.
- (43) Philostratus, *VS*, 549; *IG II² 1073 + 1074*, 3597a-e, 5090 etc.
- (44) *IG II/III² 3295-3298*, 3307; Halfmann, op. cit., no. 27.
- (45) Tobin, op. cit., 19-22. Birley, *Greek Senators*, 237 44. マンティクスがアルコンでもあったことが記録されているなら、これを驚きとする。
- (46) Tobin, op. cit., 19.
- (47) Clinton, op. cit., 1530-31.
- (48) 「図書館」やオリュンピエイオンがローマの建築物であることをもって、アテナイの人々ではなく、ハドリアヌスのようなローマ人のイニシアティブという反論も想定できる。しかし、ヘロデスのオデオンはローマ的なものであり、建築物の仕様だけでは、イニシアティブがどちらにあったかを判断する根拠とはならない。
- (49) Philostratus, *VS*, 548.
- (50) Tobin, op. cit., 22.
- (51) 第二回パンヘレニア祭でのヘロデスの役職がいかなるものであったのかは議論がある。Birley, *Hadrian*, 292. はアルコンであったと考えるが、Spawforth & Walker, op. cit., 85 はアントンテラスとする。
- (52) ex H. A. Thompson, *The Impact of Roman Architects and Architecture on Athens*, 170B, C-A, D, 170, S. Macrady & Thompson, F. H. (ed.), *Roman Architecture in the Greek World*, London, 1987, 14-15.
- (53) Tobin, op. cit., 161-162.